

館林キリスト教会 デボーションノート（2007年）

12月 1日 今日の通読箇所 列王紀下 15章13～22

「残虐行為」

ゼカリヤ王を殺して王位についたシャルムの運命はもつとはかなく、一ヶ月ののち、メナヘムのクーデターに倒れた。メナヘムが自分のクーデターを支持協力しない者に対して取ったやり方は、苛酷残虐なもので、彼をうけ入れなかったタブア市民虐殺の例がそこに記されている。「およそ国が内部で分裂すれば自滅してしまい、また家が分れ争えば倒れてしまう」キリストが言われるように、こんな状態のイスラエルは、そのころ北方によりやく強大となって来たアツスリヤにとっては良い餌食で、今その最初の攻撃を受けることになる。この際は莫大な賠償金を取られて一応済んだが、結局、最後にイスラエルを滅ぼすものは、アツスリヤだった。

12月 2日 今日の通読箇所 列王紀下 15章23～31

「アツスリア捕囚」

アツスリヤへの莫大な賠償金は結局国民の負担、それも強制的な負担に転化されたので、国民の不満が沸騰する。この間にメナヒム王は亡くなって、王子ペカヒヤが即位したものの、2年後、信頼していた副官ペカの反乱に会い、サマリヤ城に立てこもって戦ったが、とうとう天守閣で殺された。このペカ王の時代に、再びアツスリヤ王テグラテピレセルの侵入があり、イスラエル各地は占領されて、最初の捕囚（国民が捕虜として大量に外国に連れていかれる）という事態となった。時にBC734年のことと言われる。

12月 3日 今日の通読箇所 列王紀下 16章5～16

「同胞間の戦争」

この騒ぎの後、衰えつつある国の力を立て直そうとする悪あがきか、イスラエル王ペカは、スリヤ王レヂンのお先棒となり、南方ユダ王国の攻撃をする。二つの国と言っても、イスラエルとユダはもともと同胞である。それなのに、外国の軍隊と協力して同胞の国を攻めるとは、論外のやり方である。ところが一方ユダのアハズ王も苦し紛れに、はるか北方の強大国で、スリヤ・イスラエルの宿敵アツスリヤに助けを乞うことになった。アツスリヤ王テグラテピレセルはすぐスリヤに攻め込んで、スリヤの首都ダマスコを落とし、スリヤ王レヂンを殺した。おかげで一応ユダは助かったのだが、そのお礼にアハズ王は、ダマスコに駐屯中のアツスリヤ王を訪問し、取り集めたエルサレム神殿神庫の金銀

を献上した。それだけでなく、そこからアッシリヤの偶像礼拝を仕入れてきたとは、これまた論外の話であった。

12月 4日 今日の通読箇所 列王紀下 17章1～14

「イスラエルの滅亡」

今や北方にはアッシリヤがますます強大となり、また南方には昔からの大国エジプトが控えていて、アッシリヤの勢力が南方に伸長してくるのを防止しようとする。この二つの大国に挟まれた小国の、イスラエル、ユダは、どっちにつくか、なかなか舵取りが難しい。今度のイスラエル王ホセアは、アッシリヤに征服された結果、やむを得ずアッシリヤに隷属して来たのだが、今エジプトに寝返ってアッシリヤに背いた。この小細工が命取りで、アッシリヤの徹底攻撃を受け、イスラエルの完全占領、国民の根こそぎ捕囚となり、つまりイスラエル王国は今や完全に滅亡した。しかし滅亡の本当の原因は、度々の神の警告にもかかわらず、不信仰、不従順によって神に背き続け、神の保護祝福を失ったことにあると、ここに丁寧に教えてあるのである。

12月 5日 今日の通読箇所 列王紀下 17章24～34

「植民地」

アッシリヤ王は、イスラエルの人々を捕らえてアッシリヤに移し、おそらく強制労働につかせたが、そのかわり、アッシリヤの人口の多い地方の人々をイスラエルに移住させた。いわゆる植民地である。この間、自然の荒廃の影響で、増殖し狂暴化した野獣たち、ことにライオンなどの被害が出た。人々は土地の神の怒りであると考えて、アッシリヤの王に求めたので、捕囚の人々の中から祭司をイスラエルに送って、植民地の人たちに、真の神、主を礼拝することを教えさせた。しかしこれは、ここの人々の気持ちでは、いわゆる土地の神以上の意味は持たず、併せて自分自分の神を礼拝したから、結論的には、この地方は、人種の混血、多種類の宗教の混在という、植民地特有の様相を呈すようになっていった。いわゆるサマリヤ人の発生である。

12月 6日 今日の通読箇所 列王紀下 18章1～16

「敬虔王ヒゼキヤ」

イスラエルが墮落と滅亡に進んでいるときに、ユダに敬虔王ヒゼキヤが出たのは、イスラエルの滅亡が、非常な反省と緊張をユダにもたらした、その一つの現れともいえよう。イスラエルの滅亡は、彼の治世の4年のことであったと言うが、その10年後、アッシリヤ王シャルマネセルが、宿題でも片づけるように、生き残った南王国ユダを攻撃し、ここもイスラエルと同じように占領し、

エジプトに対する安全な防波堤にしようとしたのは自然の成り行きである。さてこれから、微力なユダ王国が、神を恐れるヒゼキヤ王と、預言者イザヤの祈りによって、洪水のようなアッシリヤ軍を撃退するという、有名な話が始まる。

12月 7日 今日の通読箇所 列王紀下 18章17～30

「アッシリヤ軍の脅迫」

ユダの町々を荒らしたアッシリヤ王は、大群を送ってエルサレムに迫らせ、軍使をもって脅迫し、エルサレムを開城させようとする。談判はキデロンの谷の一地点で行われたが、彼らは人々が信頼服従しているヒゼキヤ王をののしり、ヒゼキヤ王がいくらかあてにしているエジプトをののしり、ひいてはヒゼキヤとユダの人々の信ずる神、主をものものした。しかもユダ側の代表者が懇願するのも無視して、城壁の上に並んで心配そうに成り行きを見守っている、一般軍人、一般市民にも、彼らにわかる言葉で呼びかけ、今日の言葉で言えば、宣伝戦、神経戦を開始した。

12月 8日 今日の通読箇所 列王紀下 18章36～19章7

「預言者イザヤの激励」

アッシリヤの脅迫、挑発に乗らず、ヒゼキヤ王の命令を守って、城壁の上の市民が沈黙していたから、アッシリヤの軍使も拍子抜けしたかもしれない。これはエルサレムの市民の、神と王と預言者に対する信頼、また一致の現れであった。一方、この知らせは直ちに、ヒゼキヤ王のもとに、それから預言者イザヤのもとに飛んだ。主はヒゼキヤ王の祈り、国民の一致した祈り、預言者イザヤの熱心な祈りに答え、またアッシリヤの人々の傲慢、不敬虔な言葉を憎み、イザヤを通して「アッシリヤ軍は必ずエルサレム攻撃を断念して、本国に退却するであろう」と約束をお与えになったのである。

12月 9日 今日の通読箇所 列王紀下 19章8～20

「ヒゼキヤ王の祈り」

「エルサレムの人心は堅固である」という知らせが、リブナの本営にいるアッシリヤ王に届いたときはちょうど「エチオピア軍が、ユダ遠征中のアッシリヤ軍を攻撃しようとしている」というニュースが入ったため、こっちの方が動揺している最中だった。ぐずぐずできなくなってきたアッシリヤ王は、再び軍使をエルサレムに送って、いよいよ短兵急な脅迫をかける。ヒゼキヤ王は、アッシリヤ王の脅迫状を持って一人神殿に入り、心を傾け、いっさいありのままを申し上げて、神に祈ったのであった。

12月10日 今日の通読箇所 列王紀下 19章27～37

「アッスリヤ軍総退却」

主は祈りに答えてくださって、イザヤからのメッセージが来た。「アッスリヤの高慢が主の耳に入ったから、主は彼に鼻輪をかけくつわをつけて、もと来た道に引き戻す。エルサレムは安全だ。危険を避けて逃げた者もみな戻って来るだろう」 この主のみ言葉のように、たぶん悪性の伝染病のために一夜のうちにアッスリヤの将兵が大量に死んだので、戦意も戦力も失った彼らは、早々に本国に逃げ帰った。この戦果のない無駄な遠征と、たくさんの将兵の死は、アッスリヤ国内に広く不満・不安を呼び起したので、ついにクーデターが起り、アッスリヤ王は神殿において、クーデターの手先となった二人の王子に殺された。

12月11日 今日の通読箇所 列王紀下 20章1～11

「ヒゼキヤ王の病気」

このヒゼキヤ王の病気の話は、6節によると、例のアッスリヤ軍の侵入、エルサレム圧迫の頃、つまりアッスリヤ軍総退却の前のできごとだったことがわかる。おそらく国家の危機にのぞんで、あまりにも重い責任と緊張と過労が、ヒゼキヤ王の病気を引き出したのだろう。「今自分が死ねば、とてもユダとエルサレムは、アッスリヤの攻撃に対して持ちこたえられないだろう」と、ヒゼキヤ王が泣いた気持ちもわかる。それ故主は、あわれみと奇跡をもってその生命をのばしてくださったのだ。「人間は使命があるうちは死なない」これはアフリカ伝道の最中、ライオンに噛まれた時の、リビングストンの言葉だ。

12月12日 今日の通読箇所 列王紀下 20章12～21

「ヒゼキヤの軽率」

北方の脅威だったアッスリヤはやがてバビロンに滅ぼされた。新王国バビロンは、アッスリヤとは政策の転換をして、ヒゼキヤ王に対しても友好的だったので、ユダも平和となり、ヒゼキヤ王も次第に国力を回復することができた。さて今、バビロンの王から友好使節が来たとき、気をよくしていたヒゼキヤ王は、バビロンに対する感謝の気持ちからか、幾分の誇りからか、宝物倉から武器倉まで全部開いて、バビロンの使者に見せた。これらの内容はだいたい、この平和の間に国力を回復した結果でありかつその象徴でもあった。しかし彼のやり方は軽率だったから、イザヤから叱責を受けた。太平、繁栄は人の真剣緊張を損う。ヒゼキヤほどの人も、この人心の原則を免れ得なかったのか。

1 2月13日 今日的通読箇所 列王紀下 21章1～9

「悪王マナセ」

敬虔なヒゼキヤ王の子供にマナセ王、孫にアモン王と、二人続いて無類の悪王が出たのは、歴史の謎だ。マナセ王は12歳で即位したと言え、敬虔だったヒゼキヤ王の時代にはおとなしくしていた、反対の態度の人々が、若い王の時代になって、勢力を盛り返して来たのかもしれない。しかしマナセ王は壮年になって来ると、むしろ自分の方が積極的に、偶像礼拝と不道德を鼓吹したのだ。預言者たちの抵抗もむなしく、あの有名なイザヤもマナセ王によって「のこぎり引き」にされて殉教したと伝えられている。本当にこの世は、神と悪魔、善と悪の戦場だ。

1 2月14日 今日的通読箇所 列王紀下 21章10～26

「悪事の測量」

13節にある「測りなわ」「下げ振り」は、昔の測量の道具だ。神様はかつて、北イスラエル王国の首都サマリヤの、信仰と道德の状態を測量して、その罪にふさわしい罰として、この国を滅亡させてしまわれた。今や同じようにエルサレムが測られるだろう。また人が皿に盛ったごちそうを見て、それが腐敗していれば、中身を棄て、皿を洗って伏せる。神は以前、サマリヤに対してそのようになさった。いまエルサレムはどうか。預言者はそう警告した。アモン王はクーデターに倒れたが、国民はこのクーデターを承認せず、クーデターは失敗に終わり、アモン王の子ヨシヤが即位することになった。

1 2月15日 今日的通読箇所 列王紀下 22章1～13

「律法の書の発見」

ろうそくは消える前にちょっと明るくなると言うが、ヨシヤ王はユダの王家で、最後にして最高の敬虔王であった。おそらくこの王のもとに、ユダ王国の敬虔派も勢力を得たのであろう。前王の時代から偶像にみたされていたエルサレムの神殿で、主の礼拝を復興しようと、偶像の肅正清掃の作業中、人々によって旧約聖書、おそらく動物の皮に記されたモーセの五書、が発見された。王がこの聖書を朗読させて見ると、みことばの光の前に、今さらのようにこの国の宗教的墮落の現実が明らかになって、恐ろしいくらいだったのである。

1 2月16日 今日的通読箇所 列王紀下 22章14～20

「孤忠」

全部の柱が腐ってしまって、家が倒れようとする時には、一本だけ腐らない柱があったとて、家が倒れるのをくい止めることはできない。しかしそれでも、

最後まで腐らなかった柱はりっぱだ。中国ではこういう態度の人を、「孤忠」と言うが、言わばヨシア王は「孤忠」の人だ。預言者ホルダは言う。「聖書によって、ユダの宗教的・道徳的ガンが、すでに末期症状であることがはっきりわかったのだ。この上はヨシア王が、エルサレムの滅亡を見ぬように、その前に天国に行くのが、せめてもの神のあわれみだ」と。

12月17日 今日に通読箇所 列王紀下 23章1～14

「改革」

親が病気になって、もうなおらないことがはっきりしても、親孝行な子供は最後まで看病に手を尽す。それが人間の至情だ。ヨシア王は預言者ホルダの宣告を聞いてもくじけなかった。非常に熱心で、ユダの宗教改革に着手した。国中から偶像をのぞき、迷信的記念物を破壊し、逆に預言者の墓などは修復した。それを徹底させるためには、王みずから陣頭に立って、国を巡回し、作業を督励した。かくて即位18年後には、律法のと通りの「すぎこし祭り」を執行した。これらは15節以下に書いてある。

12月18日 今日に通読箇所 列王紀下 23章26～37

「パロ・ネコ」

エジプト王パロ・ネコが、大軍をひきいて北上し、アッシリアの軍勢と戦ったのが、BC605年史上有名な「カルケミシの戦い」である。結局エジプト軍は負けて退却したが、この間においてアッシリアが衰退し、バビロンが強力となる気運が醸成されたのだった。この時、北上のためイスラエル領内を通過しようとしたエジプト軍に、無鉄砲な抵抗を試み、その通過を阻止しようとして、ヨシア王は戦死した。そのあと、その子エホアハズが即位したが、いきさつの後だったから、エジプト王は彼の即位を承認せず、父王ヨシアの責任を追及して彼をハマテに留置し、その弟エリアキムを王とし、莫大な賠償金を命じた。

12月19日 今日に通読箇所 列王紀下 24章1～9

「かいらい王」

エホヤキム王はエジプトの王によって立てられた、言わばエジプトのかいらい王だった。ところがその後も、世界の情勢は動いて、ようやく北方に強大となって来たバビロンに圧迫されて、エジプトは本国に閉じこもり、当然バビロンがユダにも進出して来ることになった。仕方なくユダはバビロンの属国のようになったが、三年目に、バビロン王がエジプト本国を攻め、これに失敗して、しばらく退いたそのチャンスを見て、ユダはバビロンにそむいた。しかしこれは強国バビロンを怒らせ、またエジプトとの対抗上の必要もあって、バビロン

は大軍を送ってユダを攻撃したが、エジプト軍は沈黙して国境を出ず、バビロン軍はほしいままにユダを掠奪した。それだけではない。近隣の小国もドサクサまぎれに、ユダを犯したから、ユダは惨胆たる有様となったが、これも積年の罪の罰と言わなければならない。

12月20日 今日に通読箇所 列王紀下 24章10～20

「第一回捕囚」

このころユダの国内は、親エジプト派、親バビロン派に分れて、互いに反目競合していた。バビロンにとっては、エジプトに対する防衛上、ユダの政情不安はひどく気になるころだ。そういうわけで、バビロンは再びユダを攻撃し、その結果、今度は大量のユダの人々、すなわちユダヤ人が、捕虜としてバビロンに連れて行かれることになった。これが第一回捕囚と言われ、BC598年のことである。ダニエルたちがバビロンに引致されたのも、恐らくこの時のことと思われる。バビロンの王は今度は、エジプトのかいらい王エホヤキンのかわりに、バビロンのかいらい王ゼデキヤを立てた。

12月21日 今日に通読箇所 列王紀下 25章1～12

「亡国」

ゼデキヤ王は即位数年にして、再びバビロンにそむいた。BC588年。バビロンのネブカデネザル王は、大軍をもって攻めて来た。何しろこの頃は、バビロンは国威隆々の最盛期になっていた。しかしユダも今度は徹底的に抗戦した。エルサレムの包囲攻撃は三年に及んだが、遂に陥落し、史上まれな、徹底的しらみつぶしの、虐殺掠奪が行なわれた。ここに多くの預言者が警告した通りのことが現出して、その惨状は目も当てられず、エレミヤはその様子を「哀歌」の中で、涙と共に歌っている。我々はここで本当に「神の慈愛と峻厳」とを見るのである。

12月22日 今日に通読箇所 列王紀下 25章22～30

「亡国の上ぬり」

バビロンの王ネブカデネザルは、ユダ王国の王族や、政治的軍事的指導者を殺し、神殿その他、国中のあらゆる財物を略奪し、国民を捕虜としてバビロンに連れていった。かくしてユダ王国は滅亡した。国に残留したのはほんの少数の細民たちであったが、バビロンはなおこの地を支配するために総督ゲダリヤを立てたのである。ところが、バビロンの追求をのがれて、辛うじて身をかくしていた執念深い反バビロン派の志士たちが、この総督を殺した。敗戦後の日本で、マッカーサー元帥が暗殺されたようなものだ。この無益な反抗の結果、彼

らは残された人々と共に、エジプトに逃れざるを得なくなり、結局は「亡国の上塗り」をしたようなことになった。

12月23日 今日に通読箇所 テトスへの手紙、1：1～9

「テトスへの勧め」

テトスは、ローマの獄中から釈放されたパウロと共にクレテ島を訪問したようです。クレテの教会は、聖書が教える健全さを失いつつあったので、パウロはテトスをクレテ島に残し、その再建にあたるようにしたのです。また長老たちを選任するように命じています。なぜならクレテの人々は「クレテ人は嘘つきで、たちが悪く、怠け者で食いしん坊、と言う非難はあたっている」(12, 13節)と書いてあるような状況にあったからです。ですから、選任される長老たちは、特に、家庭生活、個人生活において、責められたり非難されたりすることがなく(6～8節)、またみことばに対しては真実な者でなければならない(9節)と、テトスに勧めて書いたのです。

12月24日 今日に通読箇所 テトスへの手紙、1：10～16

「クレテの反対者」

10節からは、クレテ教会の現状が具体的に記されていきます。パウロは、ここで教会を荒らす反対者の特徴を3つの言葉で示しています。第一のものは、「法に服さない者」、即ち、教会の定めを、ばかにしている人々です。第二のものは、「空論に走る者」であって、ただおしゃべりをしている人々です。第三のものは、自分自身が迷っている人々であって、従って、「人の心を惑わす者」です。これらは、特に「割礼のある者」、即ちのキリスト教に改宗したユダヤ人の中に多かったようです。彼らは口で言うことと行うことが違い、クリスチャンの家庭を破壊していたのです。パウロは、こういう人々に対して、健全な教えを正しく説くことで、彼らの口を封じるようにテトスに命じているのです。

12月25日 今日に通読箇所 テトスへの手紙、2：1～10

「信仰と生活の調和」

クレテの人々の多くは自堕落な生活を送っていたようです。パウロはこのことを考えながら、テトスに向かって健全な教えを説くことを勧めています。パウロは、信仰が生活の中で現されなければならないと信じていたので、テトスに対し、年老いた人々について(2～5節)、若者について(6節)、奴隷について(9, 10節)、彼らに何を勧め、どのようにふるまうべきかを教えているのです。そして、これらの人々に対して、彼ら自身の生活と態度と、なすべきことに忠実であるように勧めています。この手紙は、良いわざの重要性が強調さ

れています。2章にも「良いこと」「善良」「良いわざ」などの言葉が書いてあります。私たちは良いわざによって救われたのではありませんが、良いわざをするために救われたのは確かです。

12月26日 今日に通読箇所 テトスへの手紙、2：11～3：6

「救主なる神」

イエス様はナザレの村で少年時代をおくられました。その様子は聖書に短く記されています。「イエスはますます知恵が加わり、背たけも伸び、そして神と人から愛された」ルカによる福音書2章52節。やがて十字架でお亡くなりになるまでのイエス様のご生涯について、聖書には次のようにあります。「わたしたちの弱さをおもいやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである」ヘブル人への手紙4章15節。このイエス様について「救主なる神」（3章4節）と記されています。イエス様は人としてこの地上に生きてくださいましたが、同時に神様でいらっしゃるのです。私たちは、このお言葉からそれをよく知ることが出来ます。

12月27日 今日に通読箇所 テトスへの手紙、3：6～15

「良いわざについて」

8節の「この言葉は確実である」とは、前述を指すもので、人が根本的に新たにされるのは、キリストを信じ、聖霊を注がれたことによるということです。しかもキリストは、信じる者を良いわざに熱心なものとするお方です。だからパウロは、テトスがこれらのことを主張するように望み、クリスチャンに「努めて良いわざを励むことを心がけるよう」（8節後半）勧めたのです。ルターは、信仰と良きわざについて、ローマ書講解序文で「わざを信仰から区別することは、燃えることや輝くことが火から区別されることの不可能なように、不可能だ」と記しています。また、14節の「良いわざ」が、新改訳聖書では「正しい仕事」となっています。よって「良いわざ」とは、慈善的なわざだけでなく、「正しい職業」もさしていると言えるのです。

12月28日 今日に通読箇所 ピレモンへの手紙1：1～14

「自発的に」

パウロがピレモンへ宛てた手紙です。ピレモンは家の教会として、家庭を解放していたようです。パウロはピレモンの指導者で霊的实际的に多くの糧を与えてきました。ですから「きわめて率直に指示してもよいと思うが、むしろ愛の

ゆえにお願いする」と言い「捕われの身で産んだわたしの子供オネシモ」についてお願いしています。オネシモはピレモンの子の奴隷でしたが「不都合なこと」をして逃げ出しました。やがて、獄に軟禁されていたパウロに出会い、導かれて悔い改め、信仰の歩みを始めました。パウロはオネシモを主人のもとに送り返す必要を感じていました。主にある兄弟として彼を受け入れてほしかったからです。パウロは彼を「有益な者」と執り成し、ピレモンには良い行いを「強制されて」でなく「自発的に」と願っています。

12月29日 今日通読箇所 ピレモンへの手紙1：15～25

「負債を負う愛」

この手紙はパウロの「愛の私信」とも言われ、パウロのオネシモに対する愛が如実に示されている手紙です。そして、イエス様が私たちの身代わりとして十字架の上に私たちの罪の贖いをしてくださったことをありありと思い出させる手紙です。特にパウロの18、19節の「もし、彼があなたに何か不都合なことをしたか、あるいは、何か負債があれば、それをわたしの借りにしておいてほしい。このパウロが手ずからしるす、わたしがそれを返済する」という所は、イエス様が私たちのためにとりなしてくださる祈りそのものです。「手ずからしるす」とは、要求された賠償額を返すと約束した誓約書のことで、パウロがいかに真剣にオネシモのためにピレモンに嘆願しているかがわかります。

12月30日 今日通読箇所 エズラ記 1章1～11

「神様の時」

伝道の書3章に「すべてのことに時がある」とあるが、捕囚のユダヤ人に、今や解放、帰国の「時」が来た。バビロンのネブカデネザル大王、ペルシャのクロス大王。いずれも当時の全世界を支配した、強大な権力者である。猛烈な軍隊を動かして巨大な戦車のように世界を踏みにじり、草を刈るように敵を殺す人物だが、歴史の長い目で見れば、彼らもその時その時に神の役目に用いられた道具であった。ネブカデネザルによって奪い去られた、エルサレム神殿の金銀の備品類は、クロス王の命令で返還され、一方が破壊した神殿そのものも、70年後、他の一方の命令によって再建される。今やセシバザル（ゼルバベル）の指導のもとに、ペルシャ王家の十分な援助を受けて、ユダヤ人たちは帰国の準備に着手した。

12月31日 今日の通読箇所 エズラ記 2章1～20

「帰国者の名簿」

ユダヤの歴史家ヨセフスによると、クロス王は、預言者イザヤの書の中に、自分の使命が預言されているのを読み、また、ダニエルその他の顧問長老たちの進言を受け入れて、この挙に踏み切ったと言われる。一般の歴史家はまた、バビロン時代の占領地や捕虜を解放し、それぞれに幾分の自治を与えるのが、クロス王の一般の方針となった、という。もともとイスラエルは、エジプト脱出後、砂漠放浪の間、まだ国土もないとき、神の律法と幕屋を中心として、いわば宗教団体のように結成された。今、国土を失って後の数10年間、彼らは部落ごとに会堂を建て、礼拝を守り聖書を学び、混血を避け、系図を整え、宗教団体のような民族として生き残ってきたのである。それ故そっくりそのまま本国に移動すれば、彼らは直ちに国を回復することができたのだ。